

学校でもやればできる」と確信し、児童の表情は輝いていました。

今回、特別賞を受賞した2人の作品を紹介します。

※児童の学年は、すべて受賞当時の学年です。



伊唐小6年
丸橋 雄吾

は言っている。

「おそかったな。ないばしよったとよ。」

父の不きげんそうな声。父が腹を立てていることが、その低い声からわかる。

目の前には、赤と黒のしま模様が見渡す限り広がっている。伊唐小学校の運動場の二倍くらいはある。赤色は伊唐の土の色だ。その上に整然と盛られたうねに黒いビニールが張られている。かげのない

畑は、五月だというのに真夏のように暑い。畑のはじには、母が心をこめて育てたいもの苗が、山のように積んである。

苗の山には、苗のかんそうを防ぐためにむしろがかぶせてある。まるで黄土色の大きな岩だ。

父と母は、もう作業を始めている。

父と母は、もう作業を始めている。

父と母は、もう作業を始めている。

父の汗とからいも

に、二人で
苗を植え続
けている。

手のひら二つ分くらいの竹の棒に苗を引っかけて、土の中に押し込んでいく。

ぼくは、苗をうねの上に並べていく役だ。時間をかけていねいにやっている

と、苗を植え付けて行く父と母にすぐに追いつかれてしまう。苗の向きは、一列

目は右向きに、二列目は左向きにというように交互に並べていく。苗と苗の間か

くが同じになるようにしなければなら

ない。こうすると秋の収穫の時に耕うん機が入りやすい。中腰で後ろ向きに歩き

ながら苗を置いていく。

作業を始めてから一時間近くがたった。腰から背中までの筋肉が石のように固くなる。まるで自分の体ではないように、何度も命令しないと足が進まない。

暑さと腰の痛さで頭がじんじんして

る。ぼくは、いもと畑の土だけを見て機械のように苗を並べ続けた。

「雄吾。おまや、ちよつちきてみる。」

父がとがめるようにどなった。

「いもの向きが反対じゃらいよ。」

暑さと腰の痛さでいものことなどどうでもよくなってきた。ぼくは、小さな声で言った。

「はあ、いつになったら終わるんだろう。」

「止めたければ止め。めしは食えんぞ。」

父は、下を向いたまま手を止めずに言った。ぼくは、その場を一刻でも早く離れ

たくて畑のはしの軽トラの荷台に走り込んだ。いもの仕事なんてもうやめようと思った。父と母は、ぼくの方は見

ただ座っているだけでも全身から汗がふき出してくる。父と母は、もう三十分以

上一言もしやべらずに苗を植え続けている。二人のシャツが汗で体にくっついて

いるのが遠くからでもわかる。父と母の手を休めずに働き続ける姿を見ている

と、去年さつまいもの収穫を前にしての父の姿を思い出した。

去年の夏は、日照りが何週間も続いた。

「まこて、今日も雨は降らんとかい。」

父は、朝ご飯を食べながらテレビの天気予報を見て、きまつて独り言を言った。「新聞の予報でも今日も降らんて書いてるよ。」母もあきらめたように言っていた。にわか雨が少しでも降ると、父は空を見ながらにこにこしてきげんが良かつ

た。父は毎日畑に水をまきに行った。スプリンクラーで夕方から夜の九時までたっぷりと水をかけていた。

「雨が降らんことにはどげんもならん。スプリンクラーだけでは水がたらんぞ。」

暗くなってから帰ってくる父は、次の日の天気予報を見てはため息をついていた。自分に言い聞かせるような言葉が口ぐせになった。

「心をこめて植えても、自然には勝てんね。」

雲一つない晴れた空を見上げていたら、父と母のあの時の顔を思い出した。ぼくは、今の自分がはるかしくなった。

新しい苗の箱を持って父と母のいるうねに走った。ぼくが悪くて父と母を見ることはできなかつた。手を動かし続けることとでこまかした。不思議と足や腰の痛さは気にならなくなっていた。汗びっしょりになって植え続けた。苗がなくなつた。

まわりはもううす暗くなっていた。

「よし、今日はここまで。もどろかい。」

父が、背中を伸ばして腰をたたき、母に話した。そして、顔の汗をタオルでふきながら、ぼくの汗と土まみれの服を見

やった。

「最後までようやったね。明日もきばるぞ。」

父は、整然と並んだ緑色のうねを見ながら、ぼくの肩をぽんとたたいた。ぼくは、首にかけていたタオルで汗をふいた。タオルはなぜか父と土のおいがした。ぼくは、父がするようにタオルを頭にくるりと巻いた。ぎゅっとタオルをしぼった

手は、まだ汗ばんでいた。